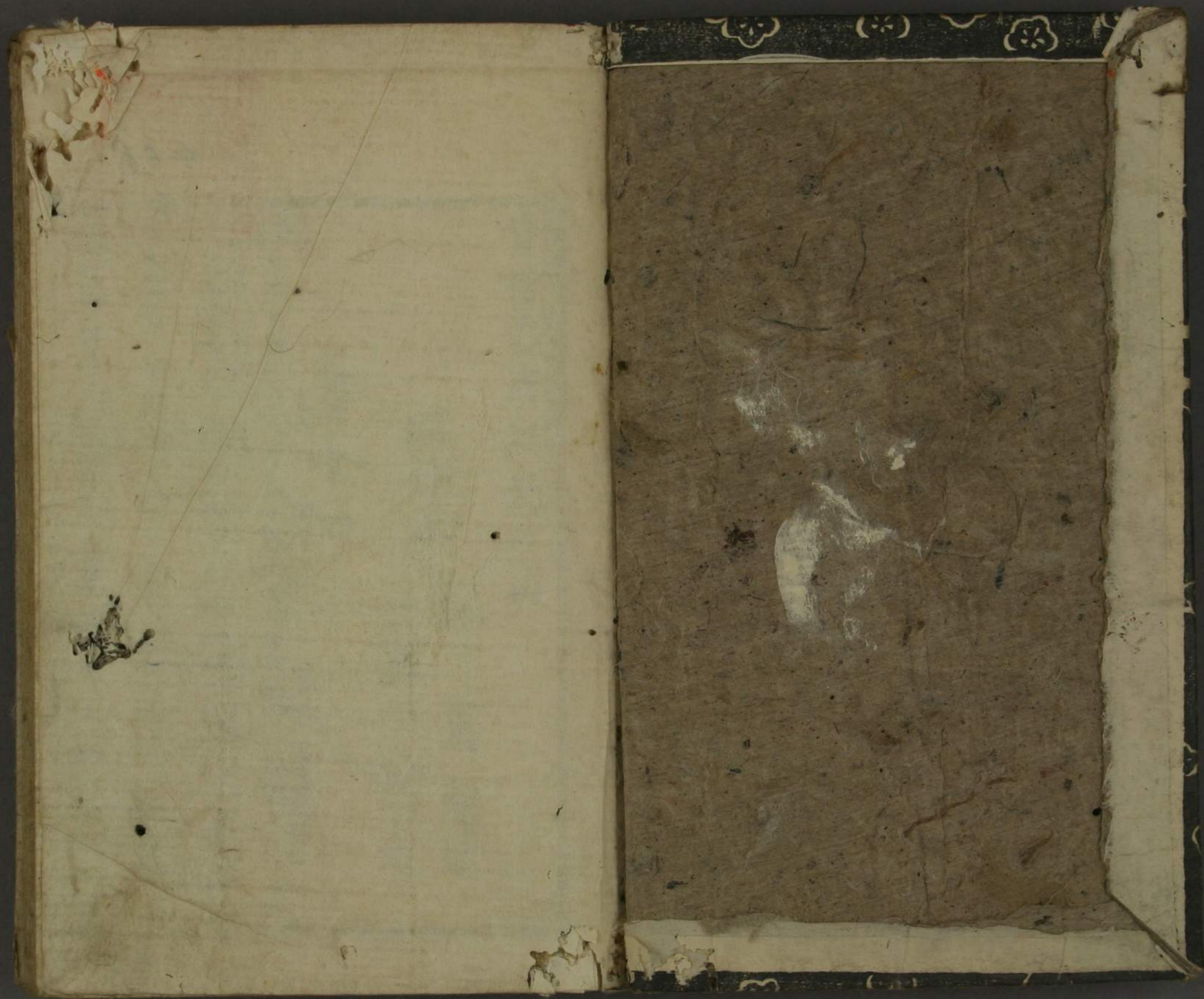


遠13  
468  
4

13  
468  
4





門へ遠13  
號 46A  
卷 4

青樓色唐紙卷之四

戲作家

三 萬著述  
東海山人校訂

第七回

眼ながうも又うち向の月も極く愛人の上六  
元祿の宮本松の巻とゆい投籠のうらひもの  
と集めしこれ冊子あり。其の愛人の侍と  
は是月八日のうらひ後りうられぬ人か



たのますくもた身なりと。搦言ゆ  
仁三郎ハ鳥逸といふ。友とらふ。そ  
のうさましく考ふまは。まの唐琴かあ  
ゆ。何まの及も逸入る上あま  
かをらば末所。扱ひてんと。二人ひと  
あく廓中にいりぬ。前の身なれを  
ひゆをまき。茶屋も笑けまは。ゆまも  
まよりて。ゆてや。さるべきと。おまへ人

目をあのみびつ。あぬぐひ眉ぶる。あ  
うり。おぬ。うくる。嵐のごとく  
こそくと大門を入る。さまきつ  
仁三郎ハつきありの。あ。燈明の燈  
籠のうさ。いらい。まら。と。あ  
ひけ。あ。拾子。ま。ゆ。あ。唐松  
あ。べ。と。思ひて。あ。居る。あ  
鳥逸ハあ。うけ。あ。イヤ大





松まつのうらもねくも。さぬぐさぬぐは  
 ううののひひののひひと日四日もうねくも。  
 ざざもも公こうの在あり研けんがが知しささねねののでで大だい  
 てて力ちからととおおととここ度とももねねととささ  
 何なにののねねねねてもも知しささねねののどどううらら唐から  
 松まつののううららももねねくくもも。何なに國くに人ひと性しやうののううららももねねくくもも。  
 三さんつつちちららいいももおおつつららししるるもも。日ひけけハハねねくくもも。  
 だだののよよ久くししるるもも。ししるるももすすくくららひひるるもも。何なに

ちちりりののううららももねねくくもも。ささぬぬぐぐはは  
 大だいくくののううららももねねくくもも。ハハ居ゐるるももすすめめととららいいもも。  
 松まつののううららももねねくくもも。何なに國くに人ひと性しやうののううららももねねくくもも。  
 何なにののねねねねてもも知しささねねののどどううらら唐から  
 松まつののううららももねねくくもも。何なに國くに人ひと性しやうののううららももねねくくもも。  
 三さんつつちちららいいももおおつつららししるるもも。日ひけけハハねねくくもも。  
 だだののよよ久くししるるもも。ししるるももすすくくららひひるるもも。何なに

若んが。系は。こころの。は。と。め。こ。肉。の  
浮。あ。こ。り。み。あ。ら。ん。と。う。し。絡。ま。を  
あ。ま。す。け。こ。ん。ま。ご。記。の。め。り。外。へ  
清。お。ま。ま。く。性。ま。す。う。か。そ。の。と。ま。い  
る。ん。ど。も。て。う。ど。け。換。ま。と。し。を。お。氣。の  
毒。と。や。ま。め。の。へ。ぞん。ま。で。ご。い。ま。し  
た。ら。う。と。性。て。居。る。と。唐。琴。う。ま。の。み  
新。造。が。音。ど。ん。や。今。あ。ら。ん。と。う。か

ね。て。ま。さ。し。う。こ。こ。ハ。ど。ろ。ご。さ。ぬ。す。人。と。う  
依。ら。う。ゆ。え。性。ご。う。う。ま。ら。か。如。お。ま。く  
唐。琴。に。射。面。て。寔。ハ。新。く。い。ん。欲。と  
ゆ。え。性。せ。る。と。そ。の。ま。や。ア。あ。ん。よ。つ。さ。ぬ  
す。ら。と。う。ゆ。め。と。ぞ。ぞ。仁。三。さん。を。後。ま  
梧。子。を。連。中。て。来。く。お。ん。る。ん  
お。う。く。く。の。ん。ぞ。性。三。ウ。そ。の。ま。ら。う  
ハ。あ。ら。ん。と。う。の。め。ら。う。三。あ。ら。ん。と。う







せんろく ぼんまがら ぼんま ちあへん  
たが。どふしと居なんす。ちのらんが  
其すめやア。ぼんまさんより一遠ま  
せんとしきくハおりのせんといふ  
たろく。いつそ 苦勞よりいのす六 仁三  
そしと夜真が内へ入るよめ 仁三  
本町の ぼんま ぼんま ぼんま ぼんま  
おの。とまぐ ぼんま ぼんま ぼんま ぼんま

あまぬしが ぼんま ぼんま ぼんま  
せんといふよめさんす。いつそお書  
解ふしと ぼんま ぼんま ぼんま  
よろく ぼんま ぼんま ぼんま ぼんま  
ゆどうする。ぼんま ぼんま ぼんま  
とよすねと ぼんま ぼんま ぼんま  
ちろく ぼんま ぼんま ぼんま ぼんま  
おの。とまぐ ぼんま ぼんま ぼんま

ちやくけりの中せう [仁三] ひとまじりも囊中  
 が空しいくら [うら] その後のころちの  
 方へののさすことし [うら] 糸亭もまじ  
 又ちとかんやよあされるはものりる。田  
 中の空の息子うたも [仁三] ちりとの工ま  
 びるともするが [仁三] るゆサはねく及ん  
 で福へね入。アいくぢやうね入目よあつこ  
 る [仁三] お揚げやとく一ッあげても

四九

ようおやうが [仁三] 肉體のうくべろ。茶屋の方か  
 わるうら [うら] るゆサそのまやア跡の  
 さ。サア二丁目へあまびるま入ト [仁三] ちりとの工ま  
 実お仁 [うら] 糸亭もまじり [仁三] ちりとの工ま  
 まいりる。

第八回

さま。あくく本町へつたられて往く。



とまへ連れらまてまのしと。そしてあの  
おぢいさんハまの出入の人で。ちりまを  
夜奥さんよこのまわしてあるでとつひ  
すが。まろりの念点がらまの甘んよ。ぬいど  
又どよしとるどくまさんしと。唐琴弓  
ちもどのも念点めりひ甘ん。今度  
身交のお後よも。るんよかうしとらし  
度びんすが。一ツよまの寝るん甘ん。ぶら  
四十一

かうすがりりまのサト。ちりまの  
仁三さんト。おんまのまのまの  
ちりとまへ。性くおんるんしと。ハイ  
うしとまのまのしとト。仁三さん  
ぬいどまを夜奥さんが。寝るんしと。  
その面。二入なぐら。おんるんでまの  
るんしと。ぬいどまのまのまのまの  
ちりま。仁三さんのまのまの。わんしとらまて



の鳥トビ子鳥トビ逸トビよびさるトビれ。おもトビしトビら  
かトビぬトビ狂トビひトビをトビしトビてトビまトビりトビ家トビよりトビ分トビたトビも。  
さトビうトビくトビひトビうトビうトビくトビとトビしトビてトビ更トビよトビのトビ一トビま  
度トビもトビあトビくトビはトビ。今トビまトビてトビのトビ後トビ夜トビ唐トビ梨トビうトビがトビ付  
きトビけトビあトビきトビ。きトビ日トビくトビとトビおトビりトビくトビるトビがトビ。かトビく  
るトビりトビ果トビくトビハトビ死トビぬトビもトビあトビるトビまトビはトビ本トビ町トビの  
新トビ屋トビとトビくトビそトビしトビくトビ教トビへトビ一トビ唐トビ松トビがトビ居トビ新  
ハトビ鳥トビ逸トビとトビまトビもトビ。さトビぬトビくトビくトビ尋トビねトビのトビまトビあトビてトビま

更トビくトビ新トビ屋トビぬトビハトビ死トビぬトビなりトビ。人トビ志トビまトビしトビてトビ本  
宅トビへトビ引トビとトビりトビ。隠トビ居トビ而トビよりトビくトビ一トビ唐トビ梨トビはトビ。  
家トビ内トビもトビあトビくトビぬトビのトビ多トビきトビくトビらトビるトビまトビりトビ。  
人トビのトビ志トビまトビしトビきトビまトビりトビもトビるトビくトビ。仁トビ志トビ弟トビハトビたトビ。  
おトビまトビされトビよトビおトビまトビされトビてトビ生トビるトビ。甲トビ斐トビるトビまトビしトビ風トビはトビ情トビ  
るトビりトビなりトビ。然トビるトビにトビこのトビごトビうトビ離トビ友トビるトビ良トビ乳トビ  
廣トビ里トビるトビんトビどトビ夜トビ真トビとトビらトビくトビらトビひトビ。志トビまトビしトビるトビをトビ  
のトビ伯トビ父トビ平トビ康トビもトビまトビもトビ。仁トビ志トビ弟トビがトビ隠トビれ











三喜

跋 論語の里仁為美擇不處仁焉得  
知と六見えたるを。とて之廓中へ趣乃  
通子よと仁の心をゆくとせむと終る  
誠乃情も通ぶる度終つるも段系ぬ  
著る丸子が著る小冊を閱るに遊子

色も瀟々かあて一旦其身張  
隨せども契情は實ある是を  
仁も亦夜與かるも乃仁ふるて  
終る丸き婚終る三九度ハ三九  
此式法一九乃跡と接摠の鉢樹り  
實生かるる作者るる終る

まこと免<sup>り</sup>た<sup>る</sup>に<sup>。</sup>愛<sup>を</sup>た<sup>ま</sup>ひ<sup>。</sup>双<sup>を</sup>糸<sup>を</sup>た<sup>は</sup>は<sup>。</sup>  
ほ<sup>ろ</sup>と<sup>。</sup>紙<sup>。</sup>税<sup>。</sup>し<sup>。</sup>と<sup>。</sup>ま<sup>。</sup>華<sup>。</sup>と<sup>。</sup>走<sup>。</sup>ら<sup>。</sup>ん<sup>。</sup>す<sup>。</sup>  
ま<sup>。</sup>は<sup>。</sup>ハ

珍宝亭れり

種の上

家在牛  
山牡丹  
里之上



